

性差に挑む：女性のエンパワーメントを進める 3つのL

クリスティーヌ・ラガルド
国際通貨基金 専務理事

米国民民主党国際研究所、ワシントン DC、2014年5月19日

皆様こんにちは。本日は、友人や志を同じくする人々に囲まれここにおりますことを大変光栄に思います。米国民民主党国際研究所は、国家の活力の源において女性の完全な社会進出を熱心に提唱しています。私は、皆さんを高く評価し、称え、そして皆さんと共にいます。

まず始めに、偉大な公人であり、我々全員、そして私に個人的に大いに刺激を与えてくださるマデレーン・オルブライト氏に御礼を申し上げたいと思います。また、本研究所の会長であるケネス・ウォラック氏と有能なクレア・シップマン氏にも感謝いたします。

さらに、本日は表彰を受けるすばらしい組織、アスワト・ニサアと会長のイクラム・ベン・サイド氏の功績を評価したいと思います。このグループは、チュニジアで男女平等と女性のリーダーシップを推進するうえで注目すべき活動を行っています。願わくば、周辺諸国、そして世界中でその活動の指標を打ち立ててほしいと思います。世界は、皆さんが進めているような活動をこなせる人材をもっと必要としています。

本日は、あるストーリー—有名ななぞなぞから始めたいと思います。ある少年が交通事故に巻き込まれ、直ちに病院に搬送されて緊急手術を受けることになりました。

病院の慌ただしく混沌とした環境の中で、外科医は大股で手術室に入ります。典型的な外科医について考えてみてください。自信に満ち溢れ、権威のあるA型人間、どのように手術すればよいのか直感的に理解できる人間です。

しかし、この著名な外科医は少年を見下ろすと、息が止まりそうになり、こう言ったのです。「私はこの少年を手術することができません・・・これは私の息子です」

実際、少年はこの外科医の息子です。しかし、少年の父親ではありません。それでは、誰でしょう？

この部屋にいる方々は答えがすぐにわかりますね。答えはシンプルです—外科医は女性で、少年の母親なのです。

しかし、教育を受けた博識な大勢の人々、そして教育を受けた博識ある女性でさえ、すぐには誰だかがわかりません。彼らは困惑し、頭の中で答えがぐるぐる回ります。叔父、祖父、継父を思いつきますが、実際筋が通った答えではありません。

残念ながら、この点にこの問題の難しさがあります。高い地位に就いている女性のことになると、我々は往々にして、これまでの偏見によって培われた悪質な心のバグに侵され心に刺さる棘で目の前が見えなくなってしまうのです。

皆さんはおわかりでしょう。こうした偏見こそが全世界で毎日皆さんが戦っていることなのです。そして、こうした偏見は世界経済に悪影響を及ぼすことがわかっていますので、国際通貨基金（IMF）が調査を実施しています。

私のメッセージはシンプルです。我々は、女性の経済活動への参加に関して 21 世紀のメンタリティーが必要としています。深く染み込んだ男女不平等の遺産を洗い流さなければなりません。

私が好んで言っているように、「性差に挑む」ことが必要なのです。「挑む」とは、リスクを負うこと、そして居心地よい思考領域から抜けだし希望を抱き、これにより恐怖心を払拭し、臆病な心を克服することを意味します。

性差に挑むとは、究極的には女性の貢献に対して、*学習 (Learning)*、*労働 (Labor)*、そして*リーダーシップ (Leadership)* という扉を開くことを意味します。この「3つのL」は、女性のエンパワーメントを推進します。それでは、それぞれの項目について簡単に説明します。

学習

まず学習から始めます。これまで私は女性の教育を何よりも重要だと考えてきました。教育は、あらゆることの基盤です。

この場合の教育は、女性を高めるものときっかけの両方を意味します。教育により人々は向上し、人々を分け隔てている境界線が崩壊します。最高レベルの教育は、排斥や狭量といった束縛を断ち切ります。

人生を長距離レースに例えるならば、トレーニング、栄養補給、そしてサポートを提供するのが教育です。優れた質の教育を受けなければ、皆さんは極めて不利な立場でスタートラインまで歩いていくことになります。

常に教育は、広大な機会への道です。20世紀を通じて経済的な指導力の推進に一役買ったのは米国の先駆的な教育政策であり、男女平等がこの戦略の重要な要素でした。

現在、我々は21世紀の大きな課題に立ち向かっており、引き続き教育、特に女性に対する教育に投資しなければなりません。ここには埋めるべき余地が若干残されています。例えば、米国では理学系や工学系の博士号取得者のうち女性が41%を占めますが、科学、技術、エンジニアリング、数学分野の労働人口で女性が占める割合は25%未満です。我々女性はもっと実力を出せるし、出さなければなりません。

しかし、教育への投資がミッションクリティカルであるのは開発途上国であり、ここで少女や女性が大きな違いを生み出すことができます。

少女への投資効果は相当なものになります。ある研究では、初等学校に1年余分に通学すると潜在的な所得能力は10~20%上昇し、中等学校に1年余分に通学すると25%上昇すると示唆しています。

突き詰めれば、女性が世の中でうまくやっていければ、社会もうまく機能するので、60カ国の開発途上国・地域を対象としたある研究では、少女に少年と同水準の教育を与えなかった場合の経済的損失は、年間900億ドルに上ると推定されました。

女性は、自ら稼いだ資源を健康や教育に支出し、社会や世代全体で力強い波及効果を生み出しやすい傾向があります。ある研究では、このように女性は所得の最大90%を投資しますが、それとは対照的に男性が投資するのはわずか30~40%です。

アフリカの古いことわざでは、「少年を教育すれば、大人を鍛える。少女を教育すれば、村を鍛える」と言われています。

そのため、我々は女性の教育の先頭に立たなければなりません。女性への教育は脅威ではなく、恵みなのです。そして、全世界の優先事項に上げなければなりません。なぜなら、女性の教育が現代社会の主因のひとつであるからです。

教育の機会を主張してタリバンに銃撃されたパキスタン人のマララ・ユサフザイの行動が賞賛されるのは、こうした理由があるからです。

学校に通いたがっている女子学生を誘拐して奴隷として売り飛ばそうとしている、ナイジェリアのボコ・ハラムのようなグループが卑劣なもの、同じ理由からです。彼らを探し出し、人生という学校に通学させなければなりません。

深い意味では、ボコ・ハラムの行動は教育が本来持つ意味の完全なアンチテーゼを表しています。というのは、彼らの行動は人間の尊厳を貶めるものですが、教育は人間の精神を高揚させ、燃え上がらせ、気高くするものだからです。

従って、我々の意見と世界の意見をまとめ、切々と訴え、女子学生を連れ戻しましょう。少女たちを尊重しましょう。

労働

それでは、今朝のテーマである2番目の「L」に移りましょう。学習の次は労働です。労働は、実業の世界で女性を成功させ、真の潜在能力を発揮させます。

女性は世界の人口の半分を占めています。しかしながら、実際の経済活動に占める割合は半分よりはるかに少ないのです。

今日、経済活動にもっと十分に貢献できる潜在能力を持つ女性は、全世界に約8億6,500万人いますが、ほぼ「10億人がその可能性を閉ざされている」のです。

世界中のどこでも、男性は女性よりも社会に参加しています。こうした男女格差は、OECD諸国で12%、中東と北アフリカでは50%と幅があります。

女性が社会進出する場合、賃金が低く、ステータスが低い仕事を強いられがちです。世界的にみれば、女性は男性のわずか四分の三しか稼いでおらず、男性と同水準の教育を受け、同水準の職業に就いてもこの事実は変わりません。確か、最も基本的な正義の規範のひとつは「同一労働、同一賃金」ではなかったでしょうか。

また、女性は経済のインフォーマルセクターでも大きな比率を占めており、未熟練の仕事で保護を受けられず、収入も不安定です。

女性が目に見えず、公にならず、そして正しく評価されない無給の仕事の負担を担っている場合が余りにも多すぎます。世界的には、女性は男性と比較して家事に2倍、育児に4倍の時間を割いています。

こうした厳しい現実を知れば、今日の世界で少女や女性が極度の貧困の主な犠牲者であるという事実は驚くに値しません。彼女たちは1日1ドル未満でかろうじて生

計を立てようとしている 10 億人の 70% を占めています。経済危機により第一に沈んでしまうグループです。

我々は、こうした事態を改善しなければなりません。余りにも多くの女性が考慮されることなく、十分に活用されず、過剰に搾取されています。これは道徳上だけでなく経済的に緊急の課題です。証拠は明白です。女性がもっと社会に貢献すれば、経済はさらに良くなります。

IMF では、この点について調査を実施してきました。経済への参加において男女格差をなくせば、経済的福祉の重要な尺度である一人当たりの所得が飛躍的に上昇します。所得の増加傾向はどこでも見られますが、特に中東や北アフリカといった地域では 27%、南アジアでは 23% と顕著です。

女性は財布のひもを握っていることを思い出してください。彼女たちは、世界の個人消費の 70% 以上を占めています。従って、我々は支出や経済成長がもっと必要なら、総需要の主体者として女性の社会的地位を更に向上させる必要があります。

女性をもっと社会に参加させるにはどうすればよいのでしょうか？例えば、財産法や相続法の女性への差別を撤廃するため、法の改正が必要な場合があります。

また、経済政策も力強い変化の担い手となり得ます。発展途上国では、女性の地位の向上は、医療への、そして教育やトレーニングへのアクセスの改善から始まります。これは、女性がお金を借りやすくなり、依存状態から脱却して、明るい未来を築くために種をまいて収穫できるようになることを意味します。

IMF は、こうした状況を真摯に受け止めています。今日全世界で実施される IMF のプログラムにおいて、IMF は厳しい状況においてもソーシャル・セーフティ・ネットの保護を重視しています。発展途上国の中でも、IMF が支援するプログラムを実施している国では、健康や教育への支出が速いペースで上昇しているというデータがあります。

また、IMF は不平等で排他的な国でも作業を実施していますが、こういった国々で取り残されているのは通常女性です。私は、アンマンで開催された移行期にあるアラブ諸国に関する会議から戻ってきたばかりですが、そこで得られた重要なポイントは、この地域はより一層の包摂的な経済を必要としていることです。ここで再び、本日の受賞者であるアスワト・ニサアが、この地域全体で女性の地位を向上するために行っている優れた業績を賞賛したいと思います。

豊かな国でも、労働条件を平等にするために実施することがあります。女性や家族に寄り添った政策がもっと必要です。例えば、公的資金を利用した育児休暇政策、質が良く値段が手頃な育児プログラム、世帯ごとではなく個人への課税、低賃金労働者向けの税控除や給付などです。

IMF は職場で女性の割合を更に高めることが可能な日本や韓国といった国で、女性の労働参加率を高めるための政策を推進してきました。

我々は、こうした類の政策がうまく機能することを知っています。ブラジルを見てみましょう。家族寄り、そして貧困層寄りの政策のお陰で、女性の社会進出率はこの 20 年間に 45% から 60% に上昇しました。スウェーデンは、主に育児と初等教育に重点的に投資しており、また柔軟な労働形態や育児休暇政策を重視していることから、世界でも有数の女性の社会参加率が高い国となっています。

もちろん、これは政策だけの問題ではありません。職場文化、すなわち働き方の変革、そして職場に依然として行き渡っているタフな男性中心の精神構造を一掃したことなどが挙げられます。

ハーバード大学教授のクラウディア・ゴールドフィン氏は、いわゆるジェンダー大収斂の「最終章」で、企業が従業員に極端に長く働けと主張するのをやめれば、男女間の賃金格差はなくなるだろうと論じています。言い換えるならば、実際にオフィスに出勤している時間ではなくクリエイティブな時間を重視するならばということです。こうした状況は、科学や技術の分野では既に生じていますが、法律や金融—私が直接関与した 2 つの分野—では、従来の習慣にしばられています。

今こそ、この最後の章を完成させる時が来たのです。我々は、職場で男女平等を達成するまで一息ついてはなりません。我々が善良な男性や女性に手を差し伸べるならば、男女平等は我々の手の届くところにあります。

リーダーシップ

本日の 3 番目の「L」です。これまで学習と労働についてお話してきましたが、最後の要素はリーダーシップです。リーダーシップは、女性が生来の能力や才能を発揮してトップに上り詰めるための要素です。

あらゆる仕事の分野において、地位が上がるほど女性の数が減少するという問題を我々は皆知っています。

この事実は、容赦なく明らかに証明されています。実業界を見てください—スタンダード・アンド・プアーズ 500 社の CEO のうち、女性はわずか 4% です。さらに、米国民民主党国際研究所がまとめた文書によると、全世界の国会の議席で女性が占める割合はわずか 20% にすぎません。女性の指導者が治める国は 10% 未満です。

しかしながら、女性が指導力を示す機会を得たら、実際に男性より優れた指導力を発揮するのは皮肉なことです。この証拠には事欠きません。例えば、ある調査では、女性が重要な地位まで昇進する、優れた実績を持つフォーチュン 500 社企業は、同じ分野の中堅企業と比較して 18~69% 収益率が高いことを示しています。

また、女性は、世界的な金融リスクの引き金となった無謀なリスク・テイク行動の類に関与する可能性はほとんどありません。例えば、1990 年代に投資業界で実施したある実験では、男性は女性より 45% 多く取引し、大きな損失を被る可能性が高いことが示されています。

これは本当に偶然なのですが、金融危機前に男性が組織を引っ張っている時に、金融セクターの過剰な不正行為について案じていたのは女性ではなかったでしょうか？ 例えば、連邦預金保険公社 (FDIC) 議長だったシェイラ・ベア氏、連邦商品先物取引委員会の元委員長ブルックスレイ・ボーン氏、現連邦準備制度理事会議長のジャネット・イエレン氏、そしてエリザベス・ウォーレン上院議員が挙げられます。彼女たちの意見はほぼ無視され、退けられましたが、彼女たちが正しかったことが証明されました。

女性は優れた上司であり、優れた危機の指導者であることも我々は知っています。例えば、7,000 人以上のリーダーを対象に行った研究によると、女性は 15 分野のうち 12 の分野で、16 の能力のうち 12 の能力で優れていることがわかりました。最近実施された別の研究によると、女性は厄介な問題を抱えた企業を救うために任命されることが多いのですが、こうした地位から解任されやすいことがわかりました。その理由は、女性を雇用するうえでリスクを負うためと言われていています。

皆さんは、これから話すことに驚かないでしょう。私にとっても驚くようなことではありません。女性は根回し、一体性、思いやり、そして長期的な持続可能性の重視といった原則に基いて決断を下す傾向があります。彼らは深い知恵の泉や、生涯にわたる苦難から培われた粘り強さによって人々をひきつけるのです。

私が個人的に崇拝しているアウンサンスーチー氏は、女性のエンパワーメントは「誰にとってもより思いやりがあり寛大で、公正で平和な生活を必ずもたらす」と述べています。

もう一度繰り返しますが、本当の意味での改革は意識の変革から始めなければなりません。我々は、人間としての強靱さは男性ホルモンに由来し、タフな人間が優秀であるという考えに終止符を打つべきです。

こうした考えは、詰まるところたいい自信に行き着くのです。女性を阻害しているのは、女性が通常持ち合わせている能力ではなく、往々にして自信の欠如です。必要な能力が十分に備わらない、準備不足の男性が出世していくのに、必要以上の教育を受け準備万端の女性が自分の能力を疑い、不可能なほど完璧な水準を保ちながら男性の影に身を潜めているのです。

こうした状況を改革すべきです。それでは、どうやって？我々の感情や情緒を鈍らせる悪意のある心の動きを打ち砕くのです。発想を転換し、語り口をリセットするのです。

私は、ジェンダーのターゲットとクォータ（割り当て）という制度が重要な役割を果たさなければならない、と思うようになりました。この山に登るには、若干の支援なしには険しくて登れません。我々は変革を強制しなければなりません。そうしないと、現状に満足しきって麻痺している状況から抜け出せないのです。

私はメンターやロールモデルを熱烈に支持しています。サーベイを何度も実施すると、自信の欠如が女性が昇進するための主な障害となっていることが挙げられます。我々は、相互に支えあう必要があります。

最終的には、私は女性が自信に満ち溢れて屋上から大声で叫び、自信がカップからあふれ、女性の意見が権力の頂点で鳴り響くような世界を見たいと思います。

まとめ

本日のまとめとして、アメリカ人作家シルヴィア・プラスの言葉「我々は朝までに地球を相続するだろう―片足がドアにあっても」を引用します。

我々が男女平等に向けて大きな一歩を踏み出したことは確かです。しかしながら、片足がドアにあるとき、我々は寒さの中で外で立ち尽くしているのです。

今こそ約束を果たす時が来たのです。全世界にいるどの少女も支障なく、別け隔てなく自らの潜在能力を発揮できる世界を作るという約束です。女性が一流の外科医になれる、あるいは女性が自ら選びとるどんな分野でも指導者になれることを、再び誰もが一瞬たりとも疑わないことです。

我々が性差に挑めば、違いがもたらされるでしょう。

ご清聴ありがとうございました。